

X-37

4238

135  
4  
5/4

新作演劇脚本

河黙阿弥作  
油坊主闇夜墨衣

版権  
興行権  
所有

東京壽永堂出版

千歳座戊子ノ第三回興行



088390-000-3

特52-611

油坊主闇夜墨衣

河竹 黙阿弥 (吉村 新七) 著

M21

DBJ-0016



X-37

4238

135

4

5/4

新作演劇脚本

古河黙阿弥作

油坊主闇夜墨衣

千歳座戊子ノ第三回興行

版権所有 東京壽永堂出版



特52  
611

- |   |                        |      |
|---|------------------------|------|
| 一 | 油坊主曾玄賀ハ偽義親法師<br>甲賀三郎義澄 | 門十郎  |
| 一 | 陸奥四郎為義                 | 左國次  |
| 一 | 義澄共家共小島之助              | 金太郎  |
| 一 | 平氏の侍須の股連藤太             | 門藏   |
| 一 | 兵卒                     | 門兵衛  |
| 一 | 同                      | 左伊次  |
| 一 | 同                      | 東三郎  |
| 一 | 同                      | 小藏   |
| 一 | 平の忠盛                   | 菊五郎  |
| 一 | 侍女撫子                   | 歌女之丞 |

祇園社だんまりの場

吉村新七著作

本舞臺一面の半舞臺正面瓦葺附き白木の廻廊上下樹木の張物て兵切都而京都祇園の社外廻りの休火不運藤太侍烏帽子半素袍取附太刀馬手さ草履よて立身下手よ兵卒四人手細附一本さしわらじよて扣居る此見得時の太鼓よを懸明く

(運藤太)先年謀叛のきざまわけて出雲の國へ罪となりし源家の一族義親事更よ悔悟のやうすあく又もやよりく味方を集め討て出ん隠謀謀れ勅命うけて正盛どの討手よ向ひ義親よ一味の者を討とりて平定よ及びしが心得御さひ先給てより義親法蘭ど名乗るもの北陸道を徘徊なま愚民を一味よめたらひて當の敵正盛どの忠盛どを現ふよしるれ也密かに陰謀せよと命うけし運藤太(○)今義家殿の養子となりし陸奥四郎義成は其義親の養子也(△)勅命ありとゆせども實父を討を恨み思ひ正盛殿御父子をば(□)折かならび同らんと笑みの内よ刀を隠し時節を待つて居るとやら(△)内裏守護の御役目も常より落平儀執られは始終は乱々ありませう(運)何れ兎も恐れ愚民をよとばす偽義親の在家を尋ねあらめ捕て烏帽子掛けさいたつ人氣をしづたよやあらぬ(○)うれよつめて種々さつた下く(△)若者評議なす(△)東の方から西へ飛た世よもまれなる光りもの(□)夫よ又祇園の社へ怪しき坊主が出るよし(△)もしや義親を企る偽義親も落憤の者(運)いかよも汝が申如く由緒のあらぬ此世の中今宵樹木の蔭よ隠くれからし捕る手柄になさん(○)左様なれば(四人)運藤太さま(運)何れも参れト時の太鼓よて運藤

太四人上中へ遣入る三腔入り高拍子に成り向ふより扇小島之助烏帽子半素袍大小草履よて出て來り花道よて(小島之助)入梅中どのいひなぐら兎角は暗れぬ日和ぐせ七ッ過より雲立花空も一面曇りしから今宵も雨よあるでわらう瀟るといふも由緒ゆる戀もへ上なき我君を祇園の邊へ忍びの御入り供奉の平の忠盛殿今宵を程なく入らせられる其先儀み女御さまへ内命うけて密の御使ひあらぬ内よ急ひて参らうト舞臺へ來る此時上手より侍女撫子文金烏田振り袖侍女の控らへ京草履よて被衣を冠り出て來り兩人舞臺にて行合左右へ除る事あつて撫子をききのけ上手へ行をととる(小)火急の用事て参る者何ゆへあつて止められしぞ(撫子)暫しおまち下さりませ(小)や左いふ壁の(撫)撫子てムリ升るトウつぎをさる小島之助見て(小)最早黄昏てムるのよ供をも迷す唯一人何れへ御出ささるのだ(撫)いつも上さまの御入りよ御先觸がムリ升のよけふは御沙汰ガムリ升せねば女御さまよと前取のら殊の外にお待かねそれよ忠道私ガ遠見よ参ましたわいな(小)それ御苦勞千方てムつた御忍びの御同勢あて忠盛殿が御供をし給あくあれへ入らせられ升る則ち拙者御先觸よ只今参りてムリ升るかよひ所でお目よ掛りました(撫)誠よ能い所ろてムりましたいなト撫子嬉しき思入(小)御待兼とムリ升ればすあしと早く女御さまへ程なく入らせ升るを何卒おしらせ下されいト爰へ上手より侍女四人出て來り(○)撫子さま(四人)御上ガ升る(撫)又お待兼が御沙汰あらん編さへ御上の事委

細申上しゆへ直御一所より参りませう(三)その忠盛さまのたのしみ今御社参りムり升る(小)チ、最早御入でるる(四)夫也へ御上の御せよ(一)撫子どのを(四)過急の御めし(撫)左様なれば橋さま(小)直御跡より参上いたせ(一)お待申て(皆々)居り升るト唄み成り女形皆々會釋して上手へ這入る時此鐘合方より成り小島之助思入あつて(小)彼等をちかしく致せども平家を討ん隠謀と露顯なして涙罪となり出雲の成てりなくも正盛も討れ玉ひし義親公の御無念を晴さん爲し我主人甲賀三郎義澄どの依り染衣の妾となり義親法師と名を呼びて北陸道を経歴なま密お集むる源氏の味方若年なれど某も此企お加りてあれ又帯する一刀は則ち主人の賜物よて雨龍丸と名附し名刀正盛父子を始めとして平家の一族打亡し修羅の御無念はらし申さんト此内上手へ運藤太四人の兵卒を引連伺ひ居て(運)怪しき若き(四人)動くまいぞト小嶋之助を取まく(小)身許を怪しき者とは(運)先達てより北陸道を義親法師と偽つて愚民をまどいす謀叛人夫は荷擔の怪し若きのサア尋處よ(四人)細か、れ(小)斯知られたる上からは最早此身の破れ口片ばしから命があいぞ(運)何をこしやくな打てどれ(四人)心得ましたト早き臺拍子よ、四人打て掛るを小嶋之助立廻りよろしくあつて四人下手へ逃て這入る運藤太刀を抜き切て掛る是より大小入りの鳴物よ成り兩人はげしき立廻りあつて切結ひあがら上手へ這入る知らせよ附臺拍子よ成り左右の植込田樂よて杉林よ成り正面に彌廊三ツ折また、み日覆へ

引上る

本舞臺奥深き杉林の影石の燈籠數本はす見さる詠らへの道具上の方よ古びたる武枚開きの宮本屋根本椽附都て祇園の社境内の体奥の方燈籠よ灯ありよろしく臺拍子よて道具留るトやはり臺拍子よ、く、に、小嶋之助運藤太兩人とを手を負立廻りながら出て來り小嶋之助運藤太を切倒しのつゝあ、り止たさす下より小嶋之助の脇腹を突く是よて小嶋之助立身よ、くるしみバつさり倒る、時の鐘を慶しく打込み大薩摩よ成る「夫縁陰森々として木片間の星もあらし風一ト吹さつと梢を鳴らしむらだけ雲の足早く見る間よ空はする墨を流すが如き宵闇よ目さすをしれぬくらがりよあすかよ光る燈籠の灯影尊き早月雨ト大薩摩の切れ雨の音よあり本雨をさつとふらし能程に夜神樂を打込ま正面杉の木の間より油坊主雷玄貫の甲賀三郎義澄鼠の氣附し墨の衣よ露をどり詠らへ麥藁の冠り物下駄をひき油さしと灯入りの銅燈籠を持ち出て運藤太を足よて蹴返し銅燈籠の灯りよて小嶋之助をどくと見て燈籠と油さしを下へ置き小嶋之助の持し刀をどる小嶋之助の袖よて血を拭ひ腰の鞘をどりこれへ納める此時向ふよ、ばた、ど人音する雷玄向ふを見て、ト、う、な、づ、き、刀を腰へさし又燈籠と油さしを持後を見かへりながらいせんの杉林木蔭へ這入る「灯影を的よ忠盛が弓矢を携へ走り出てトばた、く、小鼓の面しらひよて向ふより平井忠盛烏帽子狩衣さしぬきをはより附太刀馬手さし

忠盛の拵らへ弓矢を持走り出て花道より止り向ふをきつと見て(忠盛)時しを早月よ  
 降りゆく霖雨よくらき木下閣立つらねたる燈籠の木の間に光る灯し火も見れば頭よ白銀  
 針をうへたる如くなる怪しき出立此人影ハ人間まてはよもあるまじ一ト矢よ射留よ  
 と嚴命うけれぞこれまさ狐狸の類ひの什業あらん篤と質性見届けて命をきつと選  
 らじ木蔭よ忍び生とりてその正体を顯はしくれん「空居をさして来る道も風よ燈  
 火吹消て閑路いといものすおしト忠盛舞臺へ来る風は音よ成り燈籠の灯り消へくら  
 き思入めて忠盛行あやむ本筋鐘を打込し杉の木蔭より雷玄出と来る忠盛伺ひながら前へ  
 立雷玄身をかゝしそ下手へ行忠盛ツカくど行路をどつて引もどし立廻りあつて雷玄  
 わらをとるきつと見得此時上手右宮の戸をこはし爲義棒茶筌直垂附太刀馬手ざし好  
 もの拵らへよて此中へ這入り一寸立廻つて三人きつと見得是より詠らへの鳴物よ成り弓  
 を遣ひ三人だんまりの立廻り此内しらせなし道具蛇の目廻しよ廻し杉林の燈籠を正面  
 よ見たる道具よき程よ三人抜き合せ立廻り此時本雨のさしく降り雨中の立廻りよろし  
 く此時だんく瓦斯の灯りをくらくなし三人とを刀の光りを當よ立廻りトとまつくらよ  
 なる此とたんとろくはげしき音しそ西より東へ詠への光りものを引とる此雷氣よて  
 舞臺一面よくつと明るくなりおれにそ三人顔見合せ双方へよおれ雷玄上手よ刀をうり  
 き中に忠盛刀をさし附下手よ爲義刀をのまへきつと見得おれを木のかしら三人引ぱり此

見得よろしくどろくカチニにて拍子幕

明治二十一年九月卅日印刷  
 明治二十一年十月二日出版

(定價五錢)

著者 吉村新七

本所區南二葉町三十一番地

發行者 齋藤長吉

日本橋區蛸燈町一丁目三番地

賣捌所 吉村系

本所區南二葉町三十一番地

印刷者 町田宗七

日本橋區新右衛門町十番地

